
私は猫である。

片桐草

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私は猫である。

【Nコード】

N0998BA

【作者名】

片桐草

【あらすじ】

残念な主人のもとで暮らしていた猫の話。

吾輩はを知らなくてもばっちり読めます。

私のブログから引つ張ってきましたが、現在2年ほど更新してないためアドレスは載せなくてもいいかな、とか適当な事考えてます。

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

……とは人間社会で有名な台詞だが、失敬な話である。あれは嘘か冗談の類だ。われわれ猫には生まれた瞬間に母猫が名前をつけてくれるのだ。名前が無い猫など、生んだ直後に母猫が死ぬくらいしか有り得ない。現に本の表紙に猫の名前は書いてあるではないか。

それとは別に、何十年前の猫でありながら本を出版するということはすばらしい。内容は残念ながら読んだことはないのだが、体験記、ということは聞き及んでいる。猫の目線から人間の様子を探ることは大変に有意義であり、新しい。われわれ現代の猫も追従していきたい。夏目漱石、などと人間らしく小難しい猫の名前を聞いたことは無いが、なかなか骨のある猫だ。

さて、私は人間の区分で言う飼い猫である。性別は雄。付けられた名前はネコミミ。

私の食糧を供給してくれる雄の人間（これからは便宜上、彼のことを主人という）はあまりよく出来た人間ではないが、ネコミミという動物に強い関心を抱いているらしい。

「ネコミミって可愛いよねー」

と主人は口癖の様に言う。私の名前にするくらいなのだから、その入れ込みようはすさまじい。

思うに、この辺りには居ないネコ科の動物だろう。だがよほど珍しい種族なのか、動物園という場所では本物のネコミミを見たことは無かった。物知りで有名な亀爺も知らないという。しかし、名前からしてわれわれの親戚であるのだから、優美な身体をしているのは間違いないだろう。いつか出会ってみたいものだ。

だが、猫耳と漢字表記されるとなんとでも言いがたいものがある。

おそらく当て字だろうと見当はついているのだが、猫が猫の一部分の名前を付けられるなど、あまり面白い話ではない。まあ、そんな

ことは有り得ないに決まっているのだが。

私は漆黒の毛並みに黒の目をしている。人間と同色というのは気に食わないが、私自身はこの色に大いに満足している。夏には難儀するが、秋から冬にかけては重宝するのだ。我ながら良い星の下に生まれついたと思う。

私は華美なものを好む傾向があるようで、トラ模様などは憧れたりもする。だが、無いものねだりは褒めたものではない。無いものを欲しがるのではなく、あるものに手を加えて楽しむ。それが正しい形だ。

そういう意味では、私と主人はなかなか気が合うのかもしれない。先日も、彼はお気に入りの抱き枕に新しいカバーを用意していた。私たち猫は残念ながら、人間ほど色を識別できない。そのため色の善し悪しは分からないが、主人が言うには、

「一番塗りが巧いんだよ。種類あつたけど、もう同人の版權グッズでは最高レベルだね」

だそうだ。同人というのは、志を同じくする者、という意味らしい。私は感心した。たった一つの枕カバーを作るのに何人も人間が切磋琢磨しあうとは。人間の文明が進化するわけである。

主人のあるものを工夫するという信念は、抱き枕にとどまらない。自動車というものを知っているだろうか。これはなんとも優れた代物で、標的を殺してそのまま去っていくという恐ろしい殺害機械なのだ。昨日も何件かあつた、とニュースでやっていた。

私の主人も自動車を持つている。だが、どうやら観賞用として楽しんでるようだった。

主人の車は他の車とは一味違う。有名なキャラクターのシールというものを、車のいたるところに貼り付けているのだ。その有用性はイマイチ分からないが、主人は大いに満足している。

「ネコミミちゃん、ただいまー」

おや。主人が帰宅したらしい。彼はよく秋葉原という街へ買い物に出かけている。今日もそうなのだろう。私の推測を裏付けるよう

に、彼は大量の手提げ袋を抱えていた。もって行ったリックの中は一杯になるらしい。

「いやー疲れた。今日の戦果だよ、見てネコミミちゃん！ 限定品！」

ほう、と私はその台詞に驚く。

……買い物ではなかった。どうやら驚くべきことに、彼は戦争に行っていたらしい。この国は比較的平和なのだと思っていたが、まさか私の主人が兵隊になるとは思いもよらなかった。

……いや、そうではない。思えば彼は一番分かりやすい兵士たる行動をしていた。彼がエアガンという玩具を持っているのは知っていたが、まさか訓練のためだったとは。まさに青天の霹靂。

この男、顔や腹部に脂肪をつけ、あまつさえ動くのを嫌ってペットボトルをトイレ代わりにしているクセに、命を賭して軍に身を捧げるとは、なんと感心なことか。

折角、人語を解してこの男の自堕落さを語ってやろうと思っていたのに。これでは私の独り相撲ではないか。

だがまあ、これはコレで良かったのかもしれない。

「主人、あまり私を驚かせないでくれ」

そう言い置き、私は主人に背を向ける。

「うお?! 凄いで、うちのネコミミちゃんが喋るようになった!

この展開、次は美少女が出現するに違いない ツ！」

なにやら猛烈に感動している彼を放っておき、私は日課の散歩へ出かけるのだった。

(後書き)

昔、某サイトに同一作品を投稿したことがあります。
現在は消えているので問題ないと思います。

これは……二次創作じゃない……よね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0998ba/>

私は猫である。

2012年1月2日09時52分発行